

置いてけぼりのクエスチニング

弁財行

【登場人物表】

市村忍（17）

飯島恭介（17）

山本恵介（45）
ファーストフード店店長

下山大輝（17）
アルバイト

千葉知恵（17）
アルバイト

天野郁美（17）
アルバイト

坂井翔子（17）
アルバイト

アルバイト1

アルバイト2

コンプライアンス部門担当者

市村明子（20）
忍の姉

忍の母（45）

百貨店店員

○ 高校・正門

始業式後。

満開の桜。青空。

賑わう生徒達。

○ 同・2階教室

市村忍（17）、窓枠に肘をつき、外を眺める。

飯島恭介（17）、忍に近付く。

恭介「今日くらい履いてきたらよかったのに。」

スラックスの制服

忍「……誰も履いてないし」

恭介「折角バイトして買ったのに。1回も履いてないじゃん。あと1年で卒業だよ？」

忍「いいの」

恭介、溜息を吐く。

恭介「アンタってさ、思い切りいいのにいざ

となると怖がるよね」

忍「……（俯いて）うるさいな」

恭介、忍の頭を撫でる。

恭介「わかるけどさ」

忍「恭介は卒業したら東京行くんでしょ。そうしたら、女の恰好するの？」

恭介「するよ」

忍「（窺うように）……怖くない？」

恭介「全然。だって、東京だよ？ テレビとか、いろんな恰好した人が当たり前に歩いてるじゃん。こんな田舎と違ってさ」

忍「そっか……」

恭介「忍は？」

忍「まだ何も考えてない。でも、正社員の仕事見つけなさいって言われている」

恭介「アンタも東京きたら？ そうしたら仕事だっていっぱいあるし、好きな恰好もいっぱいできるよ」

忍「……（首を振って）そんな勇気ない」

恭介、肩を竦める。

恭介「勇気ないってわけじゃないと思うけどね。バイトしてスラックスだって買ったじ

「やん」

忍「うん……」

恭介「忍はさ、多分、勇気がないんじゃないやなくて」

恭介、忍の頭に手を置く。

忍、恭介を見上げる。

恭介「まだその時じゃないんだよ」

恭介、視線を空に向ける。

忍、つられて空を見る。

○ファーストフード店・店内

大勢の客で賑わう。

接客する忍。

山本恵介（45）、忍に近づく。

山本「市村さん、これ、遅くなっただけ」

山本、表彰状を渡す。

忍「ありがとうございます」

忍、受け取る。

下山大輝（17）、身を乗り出す。

下山「え、市村さん表彰状貰ったの？」

山本「その間本社の偉い人が偶然立ち

寄ったらしいんだけど、接客が素晴らし

い！って絶賛しててね」

下山「まじか！市村さんおめでとう！」

忍「照れ臭そうに」ありがとう」

様子进行を伺うアルバイト達。

アルバイト1「え、いいなあ。あれって賞金

でるんでしょ？」

アルバイト2「そうだね。羨ましい」

天野郁美（17）、顔を歪める。

郁美「同期なのに。なんかずるくない？」

千葉知恵（17）「あたし達だって頑張って

るのに。（大きな声で）あゝあゝ、やる気無

くす」

忍、キョトンとする。

山本「（淡々と）千葉さん、お客様がいます

よ。私語謹んでください」

知恵「（怯んで）え……はい」

アルバイト達、呆れてコソコソ笑う。

アルバイト1「（小声で）嫉妬やば」

アルバイト2 「（小声で）そもそもやる気ある時あった？ あたし見たことないけど」
知恵、顔を歪めて俯く。
郁美、周囲のアルバイト達を睨む。

○ 帰り道（夜）

帰宅する下山と忍。

忍はスカート姿。

下山 「（イライラしながら）ずるいつて！

意味わかんねえ！」

忍 「（苦笑して）そんな言ってたんだ」

下山 「市村さんと自分がそもそも同じレベル

でいると思ってたことが驚きだよ。勤怠も

覚えも悪いし、未だに新人みたいなミス

やらかしてばっかのくせに」

忍 「（困ったように笑って）まあ、同期だから。面白くないんじゃない？」

下山、気付く。

下山 「（そういや、今日ってスカートなんだね」

忍 「（苦笑して）ああ、うん。お姉ちゃん

が買えつてうるさくて」

下山 「（そうなんだ。似合ってるよ」

忍 「（そうかな？ あんまり好きじゃないんだ

けど……」

下山 「（笑って）そうなの！？ でも確かに

市村さんってあんまりワンピースとかスカ

ートとか履かないもんね。慣れない感じ？」

忍 「うん。あんまり好きじゃないかな」

下山 「（でもお姉ちゃんに言われて仕方なく履

いたわけだ」

忍 「（溜息）そう。いつもあれを着た方が

いい、その恰好はおかしいって。酷い時だ

とコスプレでもしてんのって言われる」

下山 「（笑って）コスプレ！ ひどいね！」

忍 「（女はスカート、みたいな考えがあつて。お

母さんもなんだけど」

下山 「（それは嫌だね。何を着ようとそれは個

人の自由じゃん」

忍 「ね……」

下山、忍、手を振り別れる。

○路上・バス停（夜）

行き交う車。

並んでバスを待つ人々。

忍、列に並びぼんやりと道路を見る。

大型バイクが通り過ぎる。

忍、一歩前に出てバイクを目で追う。

恭介、背後から声を掛ける。

恭介「（笑って）アンタ、顔だけ車に轢かれ

るんじゃない？」

忍、はっとして体を元に戻す。

忍「恭介！　今バイト帰り？」

恭介「そ、あんたと一緒」

恭介「恭介、バイクをもう一度見る。」

恭介「かっこいいじゃん。アンタああいうの

似合いそう」

忍、バイクが走り去った方角を見つめたまま。

忍「いつか欲しいなあ」

恭介「（揶揄うように）とか言いつつ無理だ

って思ってるでしょ」

忍「……うん」

恭介「（呆れて）無理だって思わなければ無

理じゃないよ。似合うと思う。バイクも、

男らしい恰好も。こないだ欲しいって言っ

てたごっついボディピアスも。忍は絶対に

似合うよ」

忍「……恭介、忍の頭をぽんぽんと叩く。

忍「……別に男になりたいってわけじゃ、な

いんだよね」

恭介「（きょとんとして）違うの？」

忍「ただ、好きだなって思うだけ。ああいう

の欲しいなあって。でも、男になりたいとか

は特に……」

恭介「ふうん、じゃあさ、バイクとか、ボデ

ィピアスとか、カッコいいＴシャツ着て、

どっちに見られたい？」

忍「どっちって」

恭介「男か女か」
忍「（悩んで辿々しく）どっちにも別に、見

られたくない、かな。ただ、かっこいいもの着て、かっこいい人になりたい」
 恭介「（考えて）どっちにも見られたくない、か。じゃあ男と女どっちが好き？」
 忍「どっちもあんまり」
 恭介「ふゝん。なんか忍らしいね」
 忍「（不思議そうに）……子供なんじゃないか？」
 恭介「うん。てか何でそれで子供なの？」
 忍「お姉ちゃんとか、そう言うから」
 恭介「（遮るように）くだらな。ほっときなよ」
 忍「ほっといていいの？　それが社会なんじゃないの？　じゃあ今から聞いておかないと大人になった時苦労するんじゃないの？」
 恭介「いつどんな苦労をするかは誰にもわからないよ。お姉ちゃんの言う事を聞いておけば絶対に苦労しないなんて、言いきれぬの？　じゃあお姉ちゃんはどう社会人だけど一切苦労してないの？」
 忍「（俯いて）……わからない、けど」
 恭介「わからんじやん。……あ、ほら、バス来た」
 忍、恭介と同じ方向を見る。
 バスが目の前に停まる。
 恭介、忍、バスに乗り込む。

○忍の実家（夕）

玄関を開ける忍。
 忍の母（45）、ストラックスを手にし、忍を出迎える。
 忍の母「忍！　これアンタの部屋から出てきたんだけど一体なんなの！　またこんなくだらないものにお金使った！」
 忍「（狼狽しながら）違う、これ履きたくてバイトで買ったの……」
 明子（20）、忍の母の背後からストラックスを覗き込む。
 明子「また漫画とかの影響じゃない？　男っぽい恰好とかさ、コスプレでしょ？」

忍 「へ俯いて小声で」違う……」
 忍の母 「アンタもう高校生なのよ！　いつまでも子どもみたいなことしてないで大人になりなさい！」
 明子 「そんなの買うお金あったらスカート買いなよ。卒業したらちゃんとした服が必要なんだよ？」
 忍の母 「明子の言う通りよ！　これまだ返品できるの！？　できるならしてきなさい！」
 忍 「でも……」
 明子 「ねえ、あたし欲しいワンピースあるんだけど、それ返金したお金で買おうよ！」
 忍 「自分が欲しいだけじゃん！」
 明子 「だから一緒に使おうって言ってるじゃん。それに、そんなん履いてたらアンタ周りに変人扱いされるよアンタ！　学校にコスプレしてきてるゝ。恥ずかしいゝって」
 忍の母、明子、大声で笑う。
 忍、俯いて沈黙する。スラックスの袋を強く握りしめる。
 何も言わずに部屋に戻る。蹲って泣く。

○ 高校・2階教室

恭介 「忍に歩み寄る。」
 恭介 「なんだ、今日も履いてないじゃん。スラックス」
 忍 「返品することにした……」
 恭介 「なんで？」
 忍、俯く。
 恭介、隣に座る。自分のスマホを見せる。
 動画サイト。性別不明だが美しい人々の映像が流れる。
 恭介 「ほら、これ、忍に似合うと思ってさ」
 ライダースジャケットを着たトランスジェンダーの映像が映る。
 忍 「恰好いいね。いいなあ、こういう人」
 忍、スワイプする手を止める。
 画面を拡大する。王冠の形をしたボデ

恭介「いいじゃん。アンタに似合いそう」

忍「卒業するまで付けないし」

恭介「カーポートに入れておいたら？ アタシは

そうしてる！ ほら！」

カーポートの中にある口紅、ハイヒール、
恭介「やっぱハイヒールって言ったら赤だ

よね」

忍「でも、この裏だけ赤いのもかっこいいよ」

恭介「確かに。今から買っておこうかな」

忍「東京に持って行って履くの？」

恭介「そ、向こうで買おうって思っても売

切れてたら嫌じゃない」

忍「荷物増えるよ。それにまたお父さんに見

つかって捨てられるかも」

恭介「（うんざりして）そうだった……。あ

あ、本当に早く東京行きたい。それで、す

っごい綺麗な女になって高いマンションで

暮らしてさ。したらアンタは運転手にし

てあげる」

忍「（吹き出して）バイクで？」

恭介「そ、バイクで！ だからかっこよくな

ってよね！

スカウトされるかもしれない

じゃん！」

笑い合う忍と恭介。

恭介「でも、東京に行ったからって、自由に

なれるってわけではないんだろうけどね」

忍「そうだね……。でも、環境を変えるって

いうのも、大事だと思う」

恭介「そうだね」

○ファーストフード店・店内

山本「新人、坂井翔子（17）が挨拶する。

山本「市村さんには新人さんの育成を任せ

たいんだけどどうかな」

忍「わたしですか？」

下山「表彰されるくらい優秀なんだから！

当然！」

山本「（坂井にむけて）市村さんはね、接客

がもう神なんだよ。君もぜひ参考にしてね」
翔子「よろしくお願いします！」
忍「（照れながら）よ、よろしくお願いします
す……」

郁美、知恵、遠巻きに睨む。

○ファーストフード店・外（夜）

待ち伏せしている明子。

忍、下山と翔子に挨拶して別れる。明子に歩み寄る。

忍「迎えに来てくれたの？」

明子「そ、スラックスってもう返品した？」

忍「え、してないけど」

明子「ちよっと何やってんの？ 折角このま

ま買いに行こうと思ったのに！ まあいい

や。欲しいのあるから見に行こう。返品し

たら買っておいでよ」

明子、忍の手を引っ張り連れて行く。

○百貨店・アパレルショップ内（タ）

ショッピングを楽しむ人々。

嬉しそうにワンピースを見せる明子。

忍は無感情。店員に試着を勧められる。

断る。

忍、ショーウィンドウに飾られた赤い

ハイヒールを見つける。

凝視する忍。

隣はMサイズのタグが見える。

忍「（残念そうに）サイズがないか……。恭

介の誕生日に買ったら喜びそうだと思った

のに」

溜息を吐いて立ち上がる忍。

目の前に同色の口紅が陳列されている

ことに気付く。

忍「……」

忍、口紅を手取る。

明子「何それ、可愛い。あたしにも買って！」

忍「自分で買って」

明子「いいじゃん。お揃いで持とうよ！」

忍「友達の誕生日プレゼントだから」
明子「あっそ！もういいよ！アタシこれから彼氏と約束あるから！アンタ一人で帰ってね！」

明子、膨れっ面で去る。
忍、会計をする。

○路上・バス停（夜）

バス停に辿り着く忍。
ベンチに座る恭介。

忍、気付いて歩み寄る。

忍「恭介？どうしたのこんなところで。バイト帰り？」

忍、恭介に駆け寄る。恭介の顔を心配そうに覗き込む。

恭介「……今日、バイト休み。でも帰りたくないから」

忍「恭介……」
恭介「（呟くように）……ハイヒール、父さんに捨てられたの。隠してたんだけど、部屋の中漁って見つけたみたい」

スラックスを握る恭介の手が震える。

忍、顔を歪めて恭介の手を握る。

恭介「こういうの買う癖を治せって。治せって何？あたし病気じゃないんだけど。ほんと最低」

忍「恭介……」

忍、恭介、しばらく沈黙。

忍、バックからブランドのショッパーを取り出す。

忍「これ、ちよつと早いけど、誕生日プレゼント」

恭介「嘘でしょ。これめっちゃ高いやつ！」

忍「似合うと思って」

恭介、ショッパーを開ける。
中に赤い口紅。手に持って沈黙する。

忍「（窺うように）……ごめん、迷惑だった？」

恭介、俯く。

忍「恭介……？」

忍、恐る恐る恭介の顔を覗き込む。

恭介「……ううん、嬉しくて。似合っている。

言ってくれたことが。父さんは、気持ち悪

いって言ってたから……」

忍、ほっとして微笑む。

忍「よかった」

恭介「ねえ、この後カラオケ行かない！？

これ付けたい！」

忍「いいね」

○カラオケ・個室（夜）

他の客の歌声が響く。

恭介、手鏡を見て真剣に口紅を塗る。

忍、微笑みながら恭介を見つめる。

忍「前にスカートもここで履いたね」

恭介「（笑って）店員さんが来て誤解された

こともあったっけ」

忍「（吹き出して）あったあった」

恭介、鏡を閉じる。

恭介「どう？」

恭介、パッと忍を見る。

忍「似合う！ やっぱり恭介は赤が似合うね。

流石私だよ」

恭介「（笑って）アンタじゃなくてあたしを

見なさいよ！」

笑い合う恭介と忍。

恭介「（はにかみながら）……ありがと、忍」

忍「どういたしまして」

○ファーストフード店・更衣室（タ）

出勤する忍。

鏡の前で他のアルバイト達が雑談中。

忍を見て驚く。逃げるように出て行く。

忍、首を傾げる。

知恵、入ってくる。

忍「お疲れ様です」

知恵「あ、あの、市村さん」

知恵、忍の服の袖を掴む。

忍「（驚きながら）どうしました？」

知恵「あのね、ずっと聞きたかったんだけど、市村さんってぶっちゃけトランスジェンダ、

「は……？」

知恵「（笑いながら）だって服とか、なんかやっぱり違うじゃん。みんなと。女の子らしくないっていうか。だからそうなのかな、うって」

忍「……何言ってるんですか」

知恵「あ！大丈夫だよ！あたしそういう偏見ないし！だから本当の所教えて欲しい。くって！更衣室とかトイレだってさ、やつぱり女子と同じ所使うの抵抗あるんでしょ？」

忍、知恵の手を振りほどく。

忍「やめてください」

知恵「（怯みながらも）隠さなくっても大丈夫だよ、ただ力になりたいだけなの、ほら、あたし達同期じゃん」

忍「（嫌そうな顔で）いい加減にしてもらえますか。非常識ですよ」

知恵「え、でも」

忍「信じられない」
忍、出て行く。

○同・廊下（夕）

新人「市村さん！」

翔子「市村さん、背後から忍に声をかける。」

忍「坂井さん、どうしたの」

翔子「忍の背後を見る。」

更衣室から出てくる知恵。

翔子「知恵を睨む。」

バツが悪い顔をして去る知恵。

翔子「（小声で）むっかつく！」

忍「何かあったの？」

翔子「翔子、忍を促して歩き出す。」

翔子「意見箱あるじゃないですか。アルバイトが投函できるやつ」

忍「ああ、あれ？」
翔子「そこにクソみたいな意見が入ってて」
忍「意見……？」

○同・面談室（タ）

机を挟み対面で座る忍と山本。

忍の傍に立つ下山と翔子。

山本「これなんだけど」

山本、一枚の紙を忍に差し出す。

忍、手にとって書面を見る。

以下、意見書の文字

『投稿者・匿名。市村さんはトランス

ジェンダーです。女子トイレや更衣室

を使用されるのは怖いです』

『投稿者・匿名。若い女の子のお客さ

んにだけ優しく気持ち悪いです。言

い寄られたり襲われたりしたらと思う

と不安です』

忍、愕然とする。

下山「この字、絶対千葉さんと天野さんです。

意見箱の前でコソコソしてたって他のアル

バイトから聞いてますから」

山本「（困ったように）でも証拠がないから

ね……」

下山、翔子、顔を歪める。

山本、申し訳なさそうに忍を見る。

山本「ごめん市村さん、本当にこんなこと聞

きたくはないんだけど、一応聞かせてね」

忍、俯いて書面を見つめたまま。

山本「……これは、まったく謂れない誹謗

中傷ってことであってるね？ つまり、市

村さんはトランスジェンダーではないって

ことで」

忍、ハツと顔を上げる。山本を見る。

忍、震え出す。

忍「わたし……わたしは」

忍、歯を食いしばって俯く。

忍「……わたし」

忍、涙が零れる。

翔子「（心配そうに）市村さん……！」

下山「市村さん！」

翔子、下山、忍に手を伸ばす。

山本「ごめん、市村さん、あの」

忍、立ち上がる。面談室を飛び出す。

山本「市村さん！」

○路上・バス停（夕）

雨が降っている。

恭介、バスを待っている。

びしょ濡れで走る忍。恭介の後ろを通り過ぎる。

恭介「ちよっと！ 忍！？」

恭介、忍を追いかける。

雨の中走る忍と恭介。

× × ×

恭介、忍の腕を掴む。

恭介「忍！」

忍、恭介に気付く。

恭介「（息を切らして）……なにがあったの、アンタ」

忍、呆然と恭介を見る。

忍「（息を切らして）……恭介」

忍、大声で泣き出す。

○公園・東屋（夜）

雨が降っている。

恭介「ベンチに座る忍と恭介。」

恭介「意見箱に？」

忍、俯いて頷く。

恭介「でも誰も信じてないんですよ。だから店長だってそういう言い方をしたんじゃないの？」

恭介、忍の顔を覗き見る。

忍「（叫ぶように）でも答えられなかった！」

忍、俯いてスラックスを握り締める。

「トランスジェンダーだったらセクハラしたことになるの！ トランスジェンダー」

「じゃなかったら無罪になるの！？」

恭介「忍、そうじゃなくて店長が聞きたかつ

忍 「わかつてる！ わかつてるよ！ ただの
 誹 謗 中 傷 で 収 め た か っ た だ け だ っ て ！ た だ の
 も 、 じ ゃ あ 私 は ！ ？ 自 分 で も わ か ら ない
 の に わ か っ た ふ り し て 嘘 つ か な き や い け ない
 恭 介 「 忍 ！ ！ ！ 」
 忍 「 男 か 女 か な ん て わ か ら ない よ ！ わ か ら
 ない の に 、 決 め た く ない の に ！ 決 め ない
 と い つ も 言 わ れ る ！ ！ ！ 年 し て 恥 ず か し
 い っ て ！ 女 の 子 ら し く ない っ て ！ 変 な
 奴 だ っ て ！ 」
 忍 「 恭 介 、 忍 の 手 を 握 る 。
 選 ば な き や い け ない の ！ ？ 女 も 男 も 好 き
 じ ゃ ない ！ 女 に も 男 に も な り た く ない ！
 そ の 2 つ し か ない の ！ ？ 」
 忍 「 説 明 す れ ば い い の ！ ？ ト ラ ン ス ジ ェ ン
 ダ ー じ ゃ ない で す ！ ？ 女 み た い な 恰 好 し た く
 ない だ け で す ！ ！ ？ 言 っ た っ て 理 解 な
 ん か し ない の ！ ！ ？ な ん で イ エ ス か ノ ー し
 か 選 べ ない の ！ ？ ！ ？ な ん で 選 べ ない と 説 明
 を し な く ち や い け なく な る の ！ ？ ！ ？ ！ ？
 聞 く 気 も ない 癖 に 説 明 な ん て 求 め ない で よ
 ！ ！ ！ 」
 忍 、 声 を あ げ て 泣 く 。
 恭 介 、 忍 の 背 を 抱 く 手 に 力 を 籠 め る 。
 悲 し そ う に 俯 く 。
 × × ×
 雨 が 止 む 。
 ベ ン チ に 座 る 忍 と 恭 介 。
 恭 介 「 ！ ！ ！ 落 ち 着 い た ？ 」
 忍 、 小 さ く 頷 く 。
 恭 介 「 苦 笑 し て 」 我 慢 強 い と 思 っ て た け ど 、
 ア ン タ 本 当 に 溜 め 込 む わ よ ね ！
 恭 介 、 忍 の 頭 を ぽ ん ぽ ん と 叩 く 。
 忍 、 バ ツ が 悪 そ う に 俯 く 。
 そ の 姿 を 見 て 小 さ く 笑 う 恭 介 。

しばらく沈黙。

恭介「……さっきさ、アンタ、なんで、な

んでって言うってたわよね」

恭介「……なんで好きなのを着ちやいけないの？　なんで男か女か選ばなきゃいけないの？　って」

忍、頷く。

恭介「（遠くを見つめたまま）なんでかな。なんでかはあたしもわかんない。なんで好きなのを着ちやいけないのか、なんでレズとかホモとかトランスジェンダーとか、名前につけられなくちゃいけないのか、なんで放つといってくれないのか」

忍、悲しそうに俯く。

恭介「……忍の頭をぽんぽんと叩く。

恭介「……でもそれは、アンタが悪いからじ

やない。わかる？　アンタが何かしたから

周りがそうなんじゃない。アンタが悪いから

ら周りがそうなんじゃない。普通の女の子

忍「……でも生きられない。普通の女の子

たいに、生きられない」

恭介「それはアンタが悪いの？」

忍「……私が、おかしいから。男も女も決

られないから。せめて決められたら、普通

の人みたいにな、女らしい服とか、嫌だっ

思わなければ、男の人と結婚したいって思

えるようになっれば」

恭介「……泣きそうな顔で忍を抱きしめる。

恭介「……ねえ、なんでそれが悪いの。なん

ンタが悪いの。女らしい物欲しがらない

いけないの。なんで？　普通の女

なきやいけないの。なんで？　普通

の女に生きないの。なんで？　普通

の女に生きないの。なんで？　普通

の女に生きないの。なんで？　普通

の女に生きないの。なんで？　普通

の女に生きないの。なんで？　普通

恭介「……忍、再び泣き出す。アンタでしよ」

とかホモとかオナベとか関係な

い。あなたがあなたに変な名前つけてどうするの？あなたが変な名付けの中にわざわざ収まってやってどうするの。あなたは、あなたでしょー

恭介「おかしなことなんてないわよ、なにも。あなたはあなたなんだから」

○百貨店・アパレルショップ内（夜）

恭介「忍、手を繋ぎ歩く。」

スーツを選ぶ。

店員「試着を勧める。」

忍「断ろうとする。恭介、忍を強引にフィッティングルームに押し込む。」

忍「声を出して笑う。」

× × ×

忍「カーテンを開く。」

かつこいいいスーツ姿。

恭介「店員、感嘆の声を上げ拍手する。」

他の店員も集まり、皆で小物を選ぶ。

忍「照れながら笑う。」

恭介「忍を優しく見つめる。」

○ファーストフード店・面談室（朝）

山本「机を挟み対面で座る忍と山本・コンプライアンス部門担当者。」

山本「（頭を深く下げて）本当に！申し訳ない！市村さん！僕が浅はかでした！」

忍「（驚いて）あ、あの山本さん」

山本「（項垂れて）公平に見てるつもりで全然できてなかった。そもそも市村さんの性別は全然関係のない話なのに無理に言わせるような真似をしてしまっただけ！！」

忍「（恥ずかしい。すいませんでした！）」

山本「（いやいや、全然市村さんは悪くないよ！）今回の件については本社のコンプライアンス担当者を変えて投稿者と面談することにしましたよ。他人の性別を勝手に断じる

権利も、その性別について自由に論じる権利も誰にもないからね」

コンプライアンス部門担当者、挨拶をする。

コンプライアンス部門担当者「市村さん、今回は本当に申し訳ありませんでした。いつもがんばって働いてくれていると聞いています。なのに、こんなひどい目に遭わせてしまってます」

コンプライアンス部門担当者、深々と頭を下げる。忍、驚く。

山本「僕もまだ勉強不足で、どうしたらいいかわからないことも多いし、また間違った対応をしそうになるかもしれないけど。おかしいと思ったこととか、こうしたい方がいいって言うのがあったら教えて欲しいんだ」

忍「小さく微笑んで」：「はい」

忍、面談室を出る。

知恵、郁美、入れ替わりで入室。

俯いている。

コンプライアンス部門担当者「（神妙に）他のアルバイトさん達から、意見箱に投稿をしているのを見たとき聞きました。これは事実ですか？」

知恵「（歯切れ悪く）いや、私は別にそんなことは」

知恵、郁美、バツが悪そうに視線を逸らす。

山本「千葉さん？天野さん？」

郁美、堪え切れず机を叩く。

郁美「（逆切れして）いや、でも！市村さんがトランスジェンダーだってことは事実じゃないですか！だって私達は悪くないじゃないですか！」

山本「そもそも、君はなんで市村さんがLG B T Qだと決めつけてるの？」

澤下「（歯切れ悪く）：：だってどう考えても」

山本「なんで考える必要があるの？」

澤下「え」

山本「市村さんの性別が君の仕事に何の関係があるの」

澤下「それは……」

コンプライアンス部門担当者「君達がしたことはね、立派な名誉棄損です。LGBTQであるかどうかが論点ではない。性別はあくまでも個人の自由だ。それを開示するもしないも個人の権利だ。なのに何故、君達はそのに当たり前のように踏み込んでいるんだ？なぜ君達は自分の憶測に過ぎない事を、まるで事実であるかのように決めつけ、広めているんだ？」

知恵、郁美、俯く。

コンプライアンス部門担当者「君達は、個人の名誉をいたずらに、著しく、傷付けたんだ。私達はこの会社で働く全ての社員を守る義務がある。正直これ以上、君達を雇用し続けることは難しい」

廊下の喧騒が面談室に響く。

○ファーストフード店・店内（昼）

仕事をする忍、下山。

翔子「（軍隊のように敬礼して）市村さん、偵察終わりました」

忍「（驚いて）頼んでないね！？」

下山「お、どうだったんですか坂井さん」

翔子、にっこり笑って片手で首を切る

素振りをする。

下山「へにっこり笑って」はいはいはい「」

忍「こら」

翔子、下山、笑いながら話をする。

恭介の声「忍」

忍、振り向く。

恭介、赤いハイヒールを履いてレジに並んでいる。

忍「恭介！」

忍「歩み寄る。」

忍「どうしたの？それにそのハイヒール」

恭介「父さんが、買ってくれたの。……悪か

しいって言われて自分をおかしいってこと
 にしなくちゃいけないのかな。なんで好き
 なものを着ちゃいけないのな。なんで男
 か女か選ばなきゃいけないのかな
 恭介「そう、それ。後、なんでアタシのハイ
 ヒール捨てられなきゃいけないかったのかな」
 忍「忍、恭介、笑い合う。」
 忍「新しいの買って貰ったでしょ！」
 恭介「そうだけどさ！自分で買ったものと
 忍「確かだね」
 恭介「ね。『なんで』っていうクエスチョン
 忍「うん」
 恭介「アタシは、それがアタシなんだと思う。
 その沢山の『なんで』が、クエスチョンが、
 アタシ自身なの」
 忍「忍、目を見開く。」
 恭介「だから、置いてけぼりにしないで。大
 事にして、アタシ自身を。ちゃんと拾って
 あげて。アタシが捨ててるのは、普段見な
 い振りしてる『なんで』は、全部アタシ自
 身なのよ」
 忍「私自身……」
 恭介「だから、今が、勇気を出すときなんじ
 やない？アタシの周りに向けて勇気を出
 すんじゃない？アタシはアタシの為に、
 勇気を出す時なのよ。置いてけぼりにして
 るアタシを、拾って、守るために」
 忍「忍、俯く。」
 忍 M「決心したように顔を上げる。
 ててきた。湧き出る『なんで』を、ずっと捨
 た。そうしなきゃ駄目なんだと思ってたか
 ら。でも完全に捨てて前に進むこともでき
 なくて。何度も捨てて、でも結局は
 捨てきれなくて、たまたま引っぱりだして抱
 きしめて。誰かに何か言われるたびにまた
 捨てて」
 恭介 M「私達が、私達のままで生きるには勇

気が必要だった。私達のままでいる為には
覚悟が必要だった。周りに理解してもらう
勇氣と覚悟。それが絶対に必要だと思って
いた」

忍 M「でも違った。本当に必要だったのは」

○路上・バス停（昼）

忍、恭介、並んで歩く。

恭介「：：ねえ、忍。今って、いろんな呼び
方ができて来たよね。ちよつと前まで男か

女かオカマかオナベしかなかったのに」

忍「うん、そうだね」

恭介「でも、これからももっと増えたり
して。どんな種類が出てくるのかわかんない
けど。でも、もしかしたら人の数だけ増
えて、誰も覚えきれなくなつて、誰も覚え
なくなつて。：：それで、それが、当たり

前になれば、いいね」

忍「そうだね」

忍、恭介、笑い合う。空を見上げる。

了

【参考文献】

クエスチョニングとは

<https://elementist.com/article/2767>